

ただ「郷愁」で読むのではなく……

## 宮本常一が見ようとしたものとは何か

宮本常一の言う「忘れられた日本人」とは誰なのか。

近代化の波に呑まれる村々で、人々を見る宮本の眼の裏にあったものとは。

失われた日本への郷愁だけで読むのではない作品の味わい方を

山折さんが作品の内容に沿いつつ提唱する――。

宗教学者

### 山折哲雄

●やまおり・てつお 1931年生まれ。岩手県出身。国立歴史民俗博物館教授、白鳳女子短大学長、国際日本文化研究センター所長などを歴任。著書に『近代日本人の宗教意識』『ブツダは、なぜ子を捨てたか』『空海の企て』『日本人と「死の準備」』など。

### 〈忘れられた日本人〉とは誰か

こここのところ、宮本常一さんに関する出版が続いているようだけれど、僕は東北大学の助手時代に宮本さんに一度お目にかかっているんだ。

柳田國男の女婿で宗教学民俗学者の堀一郎さんを訪ねて来られたんですよ。宮本さんの食事のお世話なんか

をして、ちょっとだけお話しました。

いわゆる大学や学問の世界にはほとんどこだわりのない自由人だなと思えました。人間として強烈な何もかき発散するようなタイプではなかったな。肩をいからせることのない静かな旅人。緊張感なんて微塵も感じさせない。

風のようにふわっとやって来て、風のように去っていった。その人間

としての気配にね、これはすごい人だなと思いましたよ。

そんな思い出があるんだけど、宮本さんの著作でいまいちばん読まれているのは岩波文庫の『忘れられた日本人』でしょう。『忘れられた日本人』は、やはり名著ですよ。ただ、僕はこのタイトルにひっかかるところがあるんです。まことにいいタイトルなんだけれど、書かれてい

る内容と必ずしもびったりしてない。というのは〈忘れられた日本人〉とは誰なのが気にかかるんです。

おそらく宮本さんは、柳田國男や折口信夫に続く、いわゆる民俗学者が見出そうとした日本人のワクからも見過ごされた、そこからも忘れ去られた、いわば見放された日本人の姿を見ようとしたんじゃないか。あの種の棄民のような、地に這いつくばって生きる日本人を発掘しようとした。そんな人たちの生から、日本人の実態を見ようとした。このタイトルに宮本さんのそんな意図を感じてらっしゃるんですよ。

現代の日本人がある郷愁を持って思い返すような日本人像が描かれてはいます。そこだけ読まれているくらいもある。だけど、そういう読みは宮本さんの意図とはちよつと距離

があるんじゃないか。

宮本さんは変容しつつある日本社会の現場に立っていた。この変化は宮本さんの目にもはっきり映っていたはず。そして、宮本さんは変化をしっかりと捉えていた。そう思います。

『忘れられた日本人』は単純な古き佳き時代への郷愁や感傷の書ではない。いわば、最近の昭和ブームと同列のものではない。「昔はよかった」的な軽薄さとは一線を画していると思います。だからこそ、いましっかりと読まれるべきなのではないでしょうか。

### 感動的な語り背景

ちよつと『忘れられた日本人』の内容をのぞいてみましょうか。

「村の寄りあい」が紹介されています。

すね。村人が寄りあいにじつくり時間をかけて、みんなの意見を集約して、全体の意思を統一していくわけだけれど、これは日本型民主主義のひとつのかたちなのではないか、欧米流のデモクラシーとは違う日本なりの民主主義があつたのではないかと宮本さんは評価した。この宮本さんの〈発見〉に『忘れられた日本人』が刊行されたころの読者は大きな感銘を受けた。

確かに僕もそうだろうと思うんだけど、宮本さんは日本の村の持つもうひとつの面も知っていた。日本の村は、ひとりひとりの構成員を、縛っている。拘束している。これもちゃんと知っていたのに、『忘れられた日本人』ではあまり触れていない。だけど、よく読むと、宮本さんのその視線をちらりちらりと感じさせられますよ。